

## 中学校英語科における手話単元の拡張と生徒の認識変容

— 『Sunshine 3』 Program 4 に Christine Sun Kim の TED トークを組み合わせさせた実践 —

さいたま市立中学校 宮城幸宏

### I. はじめに

本実践は、中学校英語科『Sunshine English Course 3』（開隆堂）Program 4「Sign Languages, Not Just Gestures!」の単元学習（手話が身振りではなく自然言語であることを扱う）を発展させ、アメリカ手話によるプレゼンテーション視聴を教材として用いた授業実践である。本稿では、当該授業の展開と生徒の反応を報告し、その教育的意義について検討する。

### II. 授業のねらい

本授業は、英語科で扱う「言語と文化の多様性」というテーマを、手話を題材として広げる試みである。手話は、表情や間（受け手に理解の準備を促す短い静止）、動作など多層的な要素から成る豊かな言語体系である。授業の目的は、手話を一つの自然言語として理解し、言語が音声だけで成り立つものではないことを実感させることにある。

### III. 授業の展開

授業は、2025年10月に、埼玉県公立中学校第3学年の1クラス36名を対象に実施した。本時の授業構成および学習活動の流れは、表1「本時の学習指導案（抜粋）」に示したとおりである。本稿では、この指導案に沿って実践の概要を記述する。使用した教科書は『Sunshine English Course 3』のProgram 4「Sign Languages, Not Just Gestures!」である。本単元の教育目標は、文法事項（現在分詞・過去分詞の後置用法、間接疑問文）の習得に加え、音声言語以外にも視覚言語である手話が存在する

ことを知り、言語と文化の多様性への理解を深めることにある。本時はその単元のまとめとして、教科書で得た知識を体験的に再構成する位置づけで実施した。

単元前半では、アメリカ手話の使用地域や使用人口、手話に通じるコーヒーショップでの体験などを題材に、教科書本文を通して知識としての理解を深める構成となっている。本時では、こうした教科書学習で得た知識を、Christine Sun Kim の TED トーク動画の視聴を通して体験的に再構成することをねらいとした。すなわち、手話が「自然言語である」という事実を情報として理解する段階から、実際の身体表現やユーモアの成立を観察し、意味生成の過程を体感する段階へと展開する点に、本時の発展的な位置づけがある。なお、TED（Technology Entertainment Design）は、各分野の専門家による講演を動画配信する国際的な講演イベントである。その内容は、学術、エンターテインメント、デザイン等、様々な分野に及び、各界の第一人者によるプレゼンテーションが動画配信されている。本授業では、Christine Sun Kim による“The enchanting music of sign language”（邦題「手話という魅惑的な音楽」。英語による同時通訳付き）を視聴し、彼女の表現に現れるリズムや間、ユーモアを観察した。本時では、①手話の意味はどのように伝わるか ②手話における時間はどのように表されるか ③手話におけるユーモアはどのように成立しているのか、④手話は誰のための言語なのかの4観点について留意して、動画を視聴するよう指示した。生徒は6人ずつのグループで感想を話し合い、代

表 1. 本時の学習指導案(抜粋)

<b>1. 単元名</b> Program 4 Sign Languages, Not Just Gestures! (SUNSHINE ENGLISH COURSE 3)			
<b>2. 単元の目標</b>			
①現在分詞・過去分詞の後置用法を用いて、名詞を詳しく説明することができる			
②音声言語以外に、視覚言語である手話について学び、手話言語世界という「文化的背景」があることを知る。			
③ユニバーサル・デザインの道具や施設を紹介することができる。			
<b>3. 単元について</b>			
英語教育の目標は、コミュニケーションを図る資質・能力の育成であるが、言語の背景にある文化に対する理解を深めることも当然に含まれる。英語の教材には、文化や環境等を題材としたものが豊富である一方、英語以外の言語、ましてや「音声言語」ではなく「視覚言語」である手話（本単元では「アメリカ手話」）を取り扱ったものについては、決して豊富であるとは言えない。本単元は、手話を真正面から取り上げたものである。このような背景としては、グローバル化の進展に伴い、多様な人々と共生していくために、異なる文化や価値観の理解が不可欠であるとの理解に加え、社会的背景として、障害者に対する言語アクセスや合理的配慮への関心が高まりつつあることも、本単元成立の文脈として挙げられる。			
文法的新出事項は、現在分詞・過去分詞の後置用法（形容詞として働き、名詞を詳しく説明する）及び間接疑問文。			
<b>4. 指導計画</b>			
時間	教材・学習活動	学習内容・評価基準	
第1時	Scenes1	現在分詞の後置用法を理解する。	
第2時	Scenes2	過去分詞の後置用法を理解する。	
第3時	Scenes3	間接疑問文の用法を理解する。	
第4時	Tuning in Program1	・世界での言語の数や、文字を持たない言語もあることを知る。 ・全国高校生手話パフォーマンス甲子園の存在を知る。 ・世界で手話はひとつではないことを学ぶ。文例：The girl <u>using American Sign Language</u> （現在分詞の後置用法）is Sophia.	
第5時	Program2	・アメリカ手話（American Sign Language）の使用人口や地域について学ぶ。文例：ASL is a sign language <u>used</u> （過去分詞の後置用法） <u>widely around the world</u> .	
第6時	Program3	・手話を通じるコーヒーショップでの異文化体験。文例：One day, I dropped by a coffee shop. I thought something was different. I didn't understand <u>why I felt so at first</u> （間接疑問文）. Soon I realized the staff and customers were using sign language.	
第7時	Review and Retell	・Program 1～3を自分の言葉で表現する。	
第8時	Action	・ユニバーサル・デザインの道具や施設を紹介し合う。	
第9時 （本時）	Christine Sun Kim の TED トーク動画・教科書	・教科書では手話が自然言語であることを知識として学んだ。最終単元である本単元では、教科書から離れ、Christine Sun Kim の TED トーク動画を通して手話が自然言語であることを体感する。	
<b>5. 本時の目標</b>			
単元のまとめとして、自然言語である手話の多様な在り方を体感する。手話は、音声がなくとも、表情・間・動作など多層的な要素から成る豊かな言語体系であることを経験する。			
<b>6. 本時の展開</b> —“The enchanting music of sign language”視聴			
	活動項目	Learning activities and contents	指導上の留意点
導入 5分	Christine Sun Kim の略歴紹介 動画説明 観点提示	・アメリカカリフォルニア生まれ。韓国系アメリカ人。聴覚障害者。職業「サウンドアーティスト」。 ・音声を用いず、手話のみで構成されたプレゼンテーションである。音声言語（英語）による同時通訳有り。 ①意味はどのように伝わるか。②時間はどのように表されるか。③ユーモアはどこで成立しているのか。④手話は誰のための言語なのか	動画の内容について簡単に紹介(*)
展開 35分	視聴（約15分） 共有（約20分）	通しで視聴する。 6人グループに分かれ（1～6班）、生徒が感じたこと・気づいた点をグループ内で議論。その後グループ毎に発表	英語字幕版を使用
まとめ 10分	板書&本時の まとめ	・板書された意見を教師が整理し、手話は音声言語に限定されない言語表現の在り方として確認。 ・次時以降の学習（言語の多様性理解）への接続を示す。 ・手話言語の背景には、独自の文化も存在する。	
(*)音を無限に小さくしていけば、やがて無音の世界と接続される。／聴覚障害者は「音」を一番気にして生活している（食事の際に陶器の皿の音が出ないように配慮する、ドアは静かに閉める等）。／音はパワー（権力）である（音の社会的構造）。／手話は豊かな言語である→手話の世界への誘い。			

表者が全体に共有し、授業者はその発言を板書に記録しながら、生徒の気づきの整理を行った。なお、本時ではワークシートやカード等は用いず、生徒の発言を板書に記録する方法を採った。

#### IV. 生徒の反応

##### (1) 発言の全体観について

視聴後の共有では、手話を「聴覚障害者のための特別な会話手段」とみなす従来の理解から、音声を用いなくても意味や感情を豊かに伝達しうる自然言語として再認識する発言が多く見られた(6グループ中6グループ)。とりわけ、時間表現やユーモアの成立、身体動作と意味との関係に着目した意見が複数のグループ(6グループ中4グループ)から示された。

##### (2) 発言内容の整理について

授業中に板書した生徒の発言を授業後に整理し、言語に対する捉え方の変化という観点から質的に分類した。具体的には、「言語の成立」「表現手段」「ユーモア」「対象理解」の四観点を設定し、授業前に見られた既存イメージと授業後に見られた捉え直しを対比する形で整理した。その結果を表2に示す。分類は筆者が行い、発言内容の主旨に基づき帰納的に整理した。

##### (3) 観点別具体例について

- ・手話の意味はどのように伝わるか

授業前には、手話を「会話の代替手段」と捉える傾向が見られたが、視聴後には「声がなくとも笑いを起こせる」「音がなくとも意味が伝わる」といった発言が多数見られた(6グループ

中6グループ)。これらは、音声の有無を言語成立の前提としない理解が生じたことを示唆している。

- ・手話における時間はどのように表されるか

「all day は太陽の動きを手で表している」

「未来は身体の前、過去は後ろで示す」など、身体全体を用いて時間や空間を表現している点に着目する発言が見られた(6グループ中3グループ)。これらの発言は、手話を単語の集合ではなく、多層的な身体表現として理解する視点の萌芽と捉えられる。

- ・手話におけるユーモアはどのように成立しているのか

「声がなくとも笑いが生まれる」という発言や、表情・動き・間によって笑いが成立しているとの指摘があった(6グループ中2グループ)。これらは、ユーモアが音声言語の言葉遊びに限定されないことへの気づきを示している。

- ・手話は誰のための言語なのか

授業前には「特定の人のための言語」という見方が示されたが、視聴後には「誰もが理解可能な表現形態」といった意見が出された(6グループ中6グループ)。これらは、手話を社会参加を支える実践的な言語として捉え直す視点の形成を示唆している。

#### V. まとめと今後の課題

本実践は、手話を自然言語として扱うことで、言語は音声のみで成り立ち、耳から理解するものであるという固定概念をゆるめ、視覚言語で

表2. 授業内発話に基づく生徒の捉え方の変容(質的整理)

観点	A: 授業前に見られた既存イメージ	B: 授業後に見られた捉え直し
言語の成立	手話は会話の代替手段	音声がなくとも意味が成立する自然言語
表現手段	単語や身振りの集合	身体全体で時間・空間・状況を表す
ユーモア	音声や言葉遊びが前提	表情・動き・間によって成立
対象理解	特定の人のための言語	誰もが理解可能な表現形態

ある手話も含む、多様な言語観への転換を促す端緒となることを試みた。

本実践は、また、英語科の学習を土台にしつつ、インクルーシブ教育の視点——「同じ教室で、多様な学び手が共に学べる環境をつくる導入・基盤となる」——を具体化したものである。手話を支援技術ではなく自然言語として扱い、字幕や手話などの言語アクセスを学習の一部として位置づけた結果、生徒は「音声と言語は同義である」という思い込みを離れつつある様子が観察され、動画視聴を通し、音声言語と視覚言語を同時に体験することにより、両言語のあいだを自然に行き来できる経験の端緒を獲得した。今後は、①前後比較の簡易指標（「手話＝言語性」等に関する2～3項目の短問）を導入し変化を数値化する、②教科横断（国語：物語の語り・手話による朗読／社会：障害者の権利／美術：身体線の線とリズム。例：太→細、直→曲、速→遅のストロークで「all day / all night / once upon a time」を描き分ける／総合：地域で誰もが情報にアクセスできるようにする仕組み（情報保障）を調べ・提案する、③当事者・ろう文化の語りと接続し、言語アクセスの社会的文脈を学ぶ—の三点を軸に、通常学級における障害理解教育の継続的な設計へと発展させたい。

なお、本実践では手話を題材としたが、聴覚障害者のすべてが手話を使用しているわけではなく、当事者の自己認識も一様ではない点には留意が必要である。本稿が志向するのは、障害を一律に「文化」と規定することではなく、障害を単なる「不足」や「できなさ」としてのみ理解する見方を問い直し、文化的差異として理解しうる可能性を教育の場に開くことである。障害理解教育においては、口話、筆談、補聴機器の利用など多様なコミュニケーションの在り方を含めつつ、差異を欠如へ還元しない視座を育むことが重要である。

本実践においては、手話を自然言語として扱うことで、生徒の言語観に一定の揺らぎを生じさせた。量的測定は行っていないものの、授業

内発話の質的整理から、言語を音声に限定しない捉え直しが見られた。

全国の通常学級において同様の実践が蓄積されれば、障害の社会モデルや人権モデルに基づく理解が、理念としてのみならず、日常の教育実践の中に位置づけられていく端緒を開く可能性がある。本実践は、その方向性を示す一つの実践事例である。

## 文献

- 青山新吾・岩瀬直樹（2019）『インクルーシブ教育—通常学級で実践するってどういうこと？—』, 学事出版.
- Florian, L. (2014) *The SAGE Handbook of Special Education, Second edition*, SAGE Publications Ltd. (倉石一郎・佐藤貴宣・渋谷亮・濱元伸彦・伊藤駿監訳 (2023) 『インクルーシブ教育ハンドブック』, 北大路書房).
- Gross, N. E. (1985) *Everyone Here Spoke Sign Language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard*. Harvard University Press. (佐藤正幸訳 (2022) 『みんなが手話で話した島』, 早川書房).
- 亀井伸孝 (2009) 『手話の世界をたずねよう』, 岩波書店.
- Kim, Christine Sun (2015) “The Enchanting Music of Sign Language.”, TED Talk.
- Sacks, O. (1996) 『手話の世界へ』, 晶文社.
- 卯城祐司ほか (2025) Program 4: Sign Languages, Not Just Gestures!, 『Sunshine English Course 3』, 開隆堂, 55-64.

## Extending Sunshine 3 Program 4 with Christine Sun Kim's TED Talk

— A Classroom Practice of Disability Awareness in a Mainstream Setting  
and Resulting Shifts in Students' Awareness —

MIYAGI Yukihiro

This paper reports an English class practice based on Sunshine English Course 3 (Kairyudo), Program 4: “Sign Languages, Not Just Gestures!” in a Japanese junior high school. Students watched Christine Sun Kim’s performance video to experience the expressiveness and creativity of sign language. Their perception appeared to be shifted from “a special means for people with hearing disabilities” to “a lively, expressive natural language that can convey humor and beauty.” Especially notable were students’ reflections on time expressions in American Sign Language, such as using hand movements to trace the sun’s path for “all day” and performing “once upon a time” with a graceful motion toward the past. This classroom practice suggests that understanding disability can be integrated naturally into English education and that such integration may deepen students’ awareness of linguistic and social diversity.